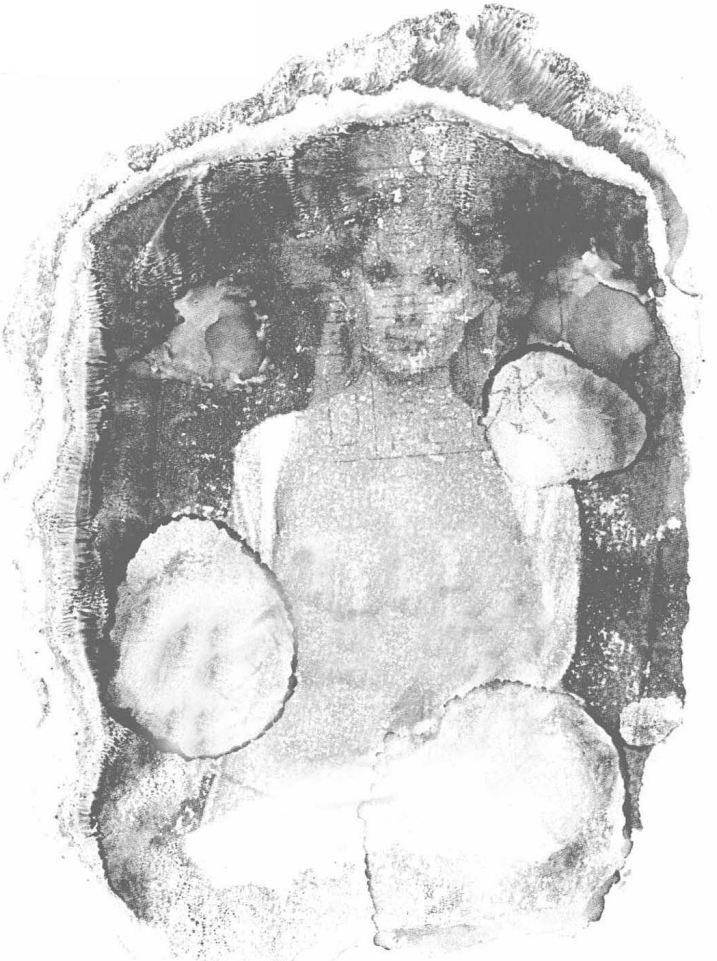
流浪者

長編

西井寿彦



遠い渚

BEACH FAR-AWAY

JUKOH NISHIMURA

西村寿行

光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編小説　遠い渚（なぎさ）　¥980

昭和54年1月30日　初版発行
昭和54年8月15日　6刷発行

著者　西村寿行（にしむらじゅこう）
東京都渋谷区代々木2-23-1
ニュー・ステイト・メナー1337

発行者　小保方宇三郎

印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京6-115347
株式会社 光文社
電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（複本製本）
© Zyukō Nisimura 1979

(分)0-0-93(製)92048(出)2271(0)
Printed in Japan

目次

第一章　漂流　5
第二章　凌辱（りょうじょく）　33
第三章　基地　89
第四章　光洋丸　145
第五章　憤怒　197
第六章　海戦　252

装幀　亀海昌次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

遠い渚（なぎさ）

西村寿行

第一章　漂流

1

夏の終わりであった。

日本海に面した直江津と柏崎の中間にある直海浜を、二人の少年が歩いていた。

長汀であった。蜒々と渚がつづいている。

白い海鳥が数羽、渚に立っていた。

勁い陽射しが海鳥の白い体を光らせている。

二人の少年はその海鳥を狙っていた。一人が手製の弓を持っている。もう一人は石を握っていた。

なんという海鳥なのかは、少年たちは知らない。かなり大きな鳥であった。

二人はぶらぶらと渚を歩いた。鳥を狙っているそぶりをみせると、すぐに舞い立つ。舞って別のところに下りるのだった。すでに何回かそれで失敗していた。

弓も石も背後に隠していた。話に夢中になっているふうを装った。なるべく、鳥のほうはみないようにした。

獲物がとれるかどうか、二人の少年はそのことに心を昂ぶらせていた。殺してどうしようとい

う考えはなかった。ただ、白くて大きな海鳥を自分の力で殺してみたいという欲望だけが、あった。

二十メートル近くまで鳥の群れに近づいた。

鳥はすこしずつ渚を動きはじめていた。少年の殺意を読んでいるのである。犬とか老人なんかだと、すぐ傍まで近寄せるのだった。

弓を持った少年が鳥の動きをみて、焦った。

少年はいきなり駆けだした。弓に矢をつがえ、弦を引き絞りながら走った。

鳥の群れは舞い上がった。

少年は足を停めた。放たれた矢は青空を背景に羽搏く真白い乱舞の中に吸い込まれた。たよりなさそうに、抛物線を描きながら飛んだ。

矢は渚に落ちたようだった。

少年はガッカリした。遠くの砂浜に翔けて行く海鳥の白い翼をみていた。海鳥はなんであんなに白いのかと思った。そういえば、渚で採れる貝も白い。海に関係あるものはみな白くなるのかしらんと、そんなふうに考えた。

二人は、ぶらぶら渚を歩いた。

「あそこだ」

石を握った少年が、前方を指した。

渚に何かが流れ着いていた。黒っぽいものだった。矢はそれに突き刺さっている。

傍に寄った二人の少年は、息を停めた。

漂流死体だった。矢が、死人の額に突き刺さっていた。

男が渚に立っていた。
はてしない長い渚だった。男のほかにはだれもいなかった。
海鳥の群れが傍にいた。足の長い海鳥だった。もの憂げに立っている。
男は海を観(み)ていた。海は凪(な)いでいた。めずらしいベタ凪ぎであった。沖を漁船が流している。
しばらく、男は海をみていた。
褐色の肌を持った男だった。上背があった。五十を過ぎた歳(とし)ごろであった。海をみつめる双眸に哀しみがたたえられていた。
やがて、男はきびすを返した。
深い靴跡が直線に砂浜を登って、浜防風の繁みに入った。
道路に車が停まっていた。
男は車に乗った。
男は国道8号線に出て、南に向かった。

島根県浜田海上保安部。
九月五日。
午後おそく、一台の乗用車が保安部に入った。
男が下り立った。昨日、直海浜に立って海を観ていた男だった。
男は無造作に保安部に入った。
浜田海上保安部は、前原正則(まえばらまさのり)二等海上保安監が統轄していた。
前原は部屋に入ってきた男をみていた。最初はだれやらわからなかった。しかし、じきに、どこかでみたことのある男だと気づいた。

「関守です」
「ああ、本庁の……」
男に挨拶されて、前原はあわてて席を立った。
関守充介は海上保安庁警備救難監直属の特別警備監であった。
海上保安庁は地方に管区海上保安本部が十一ある。
その下に海上保安部が六十五。さらに下部機構として海上保安署が五十一ある。
海上保安庁の職務は海上における船舶等の安全を守り、海上の治安を維持することにある。
さまざまな犯罪がある。
統計でみれば年間二万五、六千件の送致件数がある。その中の七パーセント弱が刑法犯となっている。
犯罪が起きれば、捜査しなければならない。捜査、逮捕、送検と、警察と同じ職務が課されている。
捜査は犯罪の起きた管轄の管区海上保安部が行なう。
たとえば海上で殺人事件が起きる。殺人はたんに海上で起きたというだけではすまない。犯人はかならず陸に逃げ込む。捜査員はそれを追う。犯人の割り出し、追跡、逮捕と、難航する。
警察の捜査員と同じだ。捜査係警官は捜査が専職であり、人員が多く、おびただしい研究機関などを擁している。しかし保安庁には、それはない。それに、海上保安官は犯罪捜査が専職ではない。海の守りがある。
船舶安全法違反、船員法違反などの海事関係法違反が年間に送致する件数で一万五千件もある。
さらには、海上公害関係法令違反や漁業関係法令違反もある。
あれもこれもやらねばならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

刑法犯を扱うのは、管区海上保安部の警備救難課である。
陸での捜査は大半が難航する。
警察の応援が得られないことが、まま、ある。縄張り意識があるのだった。
関守充介の職務は、本庁にあって各管区海上保安部の捜査への支援であった。
各本部の警備救難課では手に負えない事件が発生すると、関守充介が介入する。
海上保安庁切っての名捜査官が関守であった。対外的には名の知られた男ではなかった。捜査の表には出ないからだ。捜査に介入するといっても、直接、保安官を指揮するのではない。保安官と一緒には動かない。事件のあらましをきいて、自分で捜査する。目鼻がつけば、保安官に告げて、立ち去る。
関守とは、前原は舞鶴にある第八管区本部時代に会ったことがあった。捜査の支援に来ていたのだった。
口数のすくない男だった。
曽我一守(そがかずもり)が行方不明になったのは、八月二十五日の夜であった。
曽我一守は浜田海上保安部に勤めていた。二十四歳で、一等海上保安士であった。
その日、曽我は非番であった。
夕刻前に保安部に立ち寄っている。同僚に声をかけた。突堤で夜釣りをするのだといった。釣り好きな明るい青年であった。
突堤の中央で釣りをしている姿を目撃した釣り仲間がいた。その仲間は八時過ぎに引き揚げている。
曽我は辛抱強く釣っていた。

それが曾我をみた最後だった。その晩に、曾我一守は行方不明になった。
行方不明は翌日になってわかった。
保安部に出勤してこなかった。官舎に連絡をとったが、いなかった。
夜釣りから戻った形跡がなかった。
波止場に、曾我の釣り竿とビクが物淋しげに転がっているのが発見された。
浜田海上保安部は、一応、犯罪の可能性を疑った。だれかと喧嘩して、海に突き落とされるかどうかしたのではないかと。
突堤の周辺を捜した。
死体はなかった。
浜田警察署に捜査願いをだした。たった一日、休んだだけでの捜査願いは気が早すぎると、受けつけた警官は苦笑した。
だが、保安部には、それだけの事情があった。曾我はほとんど、アルコールはたしなまない。夜の街とは縁の薄い、勤勉な青年であった。
それに、保安官はつねに居場所を明確にしておかねばならない。いつ、どんな事情で、巡視船、巡視艇の出動とならないともかぎらないからだった。
考えられない欠勤であった。

九月一日に直海浜に漂着した死体は、新潟県警が行政解剖に付した。
若い男の腐乱死体だった。解剖の結果は、溺死と出た。
皮膚に傷があるかどうかは判明できなかった。腐乱している上に、魚に貪り喰われていた。
新潟にある第九管区海上保安部から、浜田海上保安部に、照会が来た。失踪したきりになって

いる曾我一守ではないのかと。
指紋は崩れて採取できない。服は脱げ落ちている。歯の治療はしていない。確認の方法がなかった。
曾我の郷里は岩手県であった。北上山地にある岩泉町だ。そこから、母が呼ばれた。
そして、確認した。
尻に痣が残っていたのだった。その痣だけ、何かを告げるように、魚に喰われないでいた。

2

関守充介と対した前原正則は、なぜ、関守が浜田にやってきたのか疑問を持った。
関守が足を運ばねばならぬ事件は、起きてはいない。
挨拶が終わったあとで、関守をみつめた。
重厚な容貌の持ち主であった。年齢相応の渋味だといっていえなくもないが、似た歳の前原には、それはなかった。
寡黙で、冷静な男だ。人目に立つ振舞いは避けたがる。そうした性格が刻んだ相貌なのであろうと思った。
「若い保安官が、死にましたね」
関守が、訊いた。
「ああ、曾我一守君のことですか」
「そのことを、きかしていただきたいのです」
「そのことと、おっしゃると？」

「捜査状況です」
「わかりました」
前原は資料を取り寄せた。関守が訪ねてきたわけはわかったが、なぜ、関守が曾我の死に興味を示すのかが、わからない。
あるいは、曾我一守は保安部の知らない重大犯罪に関係していたのではあるまいか――ふっと、体の冷えるのをおぼえた。
係員が持ってきた資料をみながら、前原は説明した。
説明といっても、たいした経過があるわけではなかった。
「結局、他殺とも事故死ともわからないのです。背景が何一つないものですから。ただ、自殺ではあるまいと思います。自殺をしなければならない動機が、ありませんから。もし、かれが酒に酔っていたのなら、波止場から落ちて溺死したとも考えられます。心臓麻痺ということもありますから。溺死して、死体が干潮にのって、沖に流される。ちょうど、あの翌朝は未明から十メートルほどの南風が吹いています。それに押されて、対馬海流に乗ったかもしれません。先月は海流が陸地にかなり接近して、強い引き出し流がみられました。それに乗れば、一気に隠岐諸島に持っていかれるかもしれません。海流はそこで大きく外海に迂回して、ふたたび能登半島に接近しています。死体が海流に乗った可能性は、あります」
溺死体の捜査ほど困難なものはない。船から海に突き落とせば、泳ぎの達者でない者はじきに死ぬ。
証拠は何一つ残らない。
他殺か事故死か、確かめようがない。
「それで、アルコールは？」

関守はおだやかに訊いた。
「飲んでいたと思われる形跡は、ありません。たぶん、飲んでいなかったのではないかと思われます。もともと、飲めない性ですから」
「結論は、でましたか」
「一応は、事故死ではないかと、想定しています。もちろん、犯罪の可能性もないわけではなく、当夜、港に停泊していた船舶、港を出た船舶などは、徹底的に調べてみました」
資料を、前原は関守に渡した。
曾我一守の姿を最後に釣り仲間がみたのが、八時過ぎである。それから朝までに出航した船舶は三隻あった。
栄進丸　八十屯
幸徳丸　百二十屯
光洋丸　二十屯
の三隻であった。
主な港への船舶の出入りは港湾管理事務所に届け出る義務がある。船名、船籍、屯数、入港日、積み荷、出港日、目的地などを、港湾事務所の所定用紙に記載する。
栄進丸は十時に出港していた。目的地は新潟港。そこから雑貨を積んで北海道小樽港に向かう予定になっていた。
幸徳丸の出港は夜半過ぎの午前一時。一路北海道に向かっていた。北海道から重油を積んで新潟に向かう予定だった。
光洋丸は同じ管区内の境港に向かっていた。出港は十時三十分になっていた。境港で冷凍機を積んで那覇に向かう予定であった。

その他に漁船の出漁が未明に十四隻あった。いずれも沿岸操業の小さな漁船であった。
曾我一守の水死体が直海浜で発見されてから、浜田保安部はそれらの船の調べをはじめた。
栄進丸は新潟港で、幸徳丸は小樽港で、光洋丸は境港でそれぞれ調べられた。
栄進丸と幸徳丸には異常は認められなかった。船員たちの表情に暗い翳りはなかった。
光洋丸には、わずかに、ひっかかるものがあった。しかし、それとて、曾我一守と結びつくかとなると、疑問であった。
光洋丸が境港に入ったのは、翌二十六日の午後三時前であった。
光洋丸は、それっきり、動かなかった。九月三日に港を出て那覇に向かうまでの八日間、岸壁に張りついたままだった。
境海上保安部の巡視艇が二十七日に光洋丸を臨検した。不審船とみての検索であった。乗組員が五人いた。二十屯の船に五人の乗組員は多すぎる。
それに、光洋丸は魚運搬船であった。よけい、おかしい。
船長は野田広宣という男だった。五十近い歳だった。
野田は、東京から送られて来る冷凍機を積みにきたのだといった。その冷凍機はすでに境港の倉庫に入っていた。
なぜ、積まないのかと、保安官が訊いた。
野田は、荷送り主が来ないのだという。荷送り主はだれかと訊くと、野田は知らないと答えた。
保安官は野田を保安部に同行して調べた。
野田の供述にはさしておかしいところはなかった。
野田は魚を集めに出た。八月二十日だった。光洋丸の船籍は天草にある。日本海に入ったが、その航海は思うように魚が集まりそうになかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com